



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4330 号 2018.4.20 発行

ギャンブル依存症の家族、「借金1000万円以上を肩代わり」が15%

読売新聞 2018年4月20日

ギャンブル依存症の人の家族の約8割が借金を肩代わりし、約15%は肩代わりした額が1000万円以上になるという調査結果を「ギャンブル依存症問題を考える会」（東京）と筑波大学の森田展彰准教授らがまとめた。

依存症で家族が経済的困難や家庭不和などの問題に巻き込まれる一面が浮き彫りになった。

同会が支援するギャンブル依存症の人の家族200人に調査した。借金を肩代わりしたことがある人は166人。肩代わり額が100万円以上の方は142人で、うち29人は1000万円以上を支払っていた。ギャンブルはパチンコ・パチスロが約9割を占めた。

家族に与えた影響としては「経済的困難」（77%）、「家庭不和・別居・離婚」（56%）、「本人から脅しや言葉の暴力を受けた」（37%）などが多かった（複数回答）。子どもがいる家庭からは「イライラを子どもにぶつけてしまう」「不安や憂鬱で子育てが困難」「子どもがギャンブル依存症にならないか心配」などの声も寄せられた。

同会代表理事の田中紀子さんは「国が大規模な調査を行い、それを基に抜本的な対策を講じてほしい」としている。

セクハラを受けて思った、社長はかっこいい

NHK ニュース 2018年4月20日



セクハラを受け、会社に失望した人がいます。セクハラを受け、会社への信頼が高まった人がいます。いまネット上をにぎわすセクハラへの意見や体験。会社への思いはどこでこんなに変わるのか、望まれる対応も含めて考えてみました。

（ネットワーク報道部記者 高橋大地 郡義之 藤目琴実）

社内セクハラより、声をあげにくい

「若いころを思い出して苦しい」

セクハラに関するソーシャルメディア上の反応です。事務次官が女性記者にセクハラ発言をしたとされる問題。これをめぐって仕事先からのセクハラについてみずからの体験や思いを投稿する人が相次いでいます。

「笑って上手くかわせ、が先輩からの教え。クライアントに呼び出されたら、何時でも行かねばならない」

「相手が上得意様であるほど社内のパワハラよりも声をあげにくく揉み消されがち」



「個人で抱え込んでうつつで職を失ってって、結構わたしの業界多い」
残念ながら目立つのは、自分の会社に救いを求めたけれど、失望したという声です。

セクハラには土壌がある

実際、相談機関に寄せられるのはどんなものなのか、セクハラ問題を重点的に扱っている労働組合「パープル・ユニオン」に聞いてみました。

社外との間のセクハラ相談で多いのは“自分の会社で対応してくれず不信感を募らせたケース”。体調を崩し、休職や解雇に追い込まれ、やっと相談するケースもあるそうです。そして執行委員長の佐藤香さんが指摘するのは、セクハラが起こる土壌。それが企業側にあるという点です。



佐藤香さん

「上司から、接待の場に呼ばれお酌をするよう求められた」

「接待の帰り際に“送ってあげて”と言われ2人きりでタクシーに乗せられた」

そうした相談が示すように、セクハラは突発的に起こるものでなく、企業側の姿勢が温床になっているケースが多いと佐藤さんは見えています。

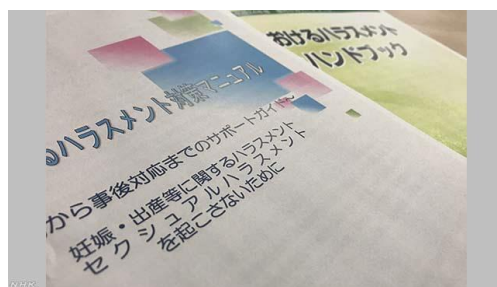
「まず企業の姿勢が変わらないとセクハラが起きやすい環境は変わりません。営業などへの影響をおそれて会社がきげんと対応しないこともあり、問題を被害者が抱え込んでしまうんです」(佐藤さん)

×個人対個人 ○組織対組織

それでは企業はどう対応していけばいいのか。

「個人の問題にわい小化させてはいけない」——企業に向けたハラスメント対策の研修を行っている、三木啓子さんのことばです。

年に全国の80社ほどで研修を行うという三木さん。個人でなく、組織が前面に立たないといけ



ない理由があると言います。

「仕事の中で起きたトラブルだからです。会社の仕事を進めていて、トラブルにあったのだから個人の問題ではありません」

「“社外でセクハラ問題が起きた”その時は、本人でなく組織が相手側にしかるべき対応を求める、研修ではそう話しています」

三木啓子さん

実際は…

企業などからセクハラへの対応について相談を受けることもあるそうですが、アドバイスをしてもきちんと対応しているケースばかりではないようです。

「企業の中に、大ごとにしたくないという雰囲気がまだあります。相手が誰であっても、きちんと対応する姿勢になっているか振り返ってほしい」(三木さん)

直ちに抗議よりもまず

また、相手に強い姿勢を示す前に、大切なことでもあります。

「セクハラの場合、相手企業や組織に、直ちに抗議することが必ずしも正しいとは言えません」

南川麻由子さん

セクハラ問題に詳しい、南川麻由子弁護士の指



摘です。被害者から会社に申告があっても「周りに知られたら印象が悪くなるかもしれない」、「相手の企業から報復があるかもしれない」そうした悩みを抱えながら、訴えていることも多いからです。

大切なのは事実をしっかりと確認すること、そしてどんな対応を希望するのか、本人の意思も尊重することでした。

「本人は相手と会わないように、担当する会社を変えることだけを望んでいるのかもしれませんが。逆に自分が開拓してきた担当企業は変えたくなく、相手側と慎重な交渉をしてほしいと考えているかもしれません。そうした考えを尊重したうえで、その後も話を聞き続けていくことが大事です」

「話を聞いて行く中で『やはり何としても抗議をしたい』となれば、企業としてしっかりと抗議していく。勇気を出して訴えた人を守りながら対応していく姿勢と、当事者との信頼関係が大事なんです」

社長は、かっこよかった

今回、企業の姿勢に厳しい意見が圧倒的に多数でした。でもネット上の声をよーく見ていると、本当に時々ですが、おっと思う体験が載っていました。

その一つ。「昔、後輩が超大手取引先の担当者からハラスメントを受けた。その報告を聞いた当時の社長は『俺が行って取引やめると言う』と、即答した。あの時『社員がなにより大切』と、言い切った、社長はかっこよかった」

もう一つ。「昔、営業時代にクライアント先の男性からセクハラ発言に遭い、会社の上司に相談した。契約のため我慢するべきか迷った。その上司が『そんなクライアントうちは要らないから』と、上から抗議して守ってくれた。すごく安心した」

こうした声に目がとまるのは、まだこうしたことが社会に少ないと思うからで、こういう世の中になってほしいという願望があるからかもしれません。社員を大切にする会社が悪い会社のわけは絶対なくて、クライアントを切ったことで利益が落ちることはあるかもしれない、けれど、大切にされるなら社員はそこで働き続けたいと思い、みんながそう思うならば、会社の成長につながるのではないかとも思うのです。

ハラスメントへの対応は、会社が何を大切にしているのか、それが問われる事態のように感じました。

いつか将来、今回かっこいいと思った社長や上司の話が、「今の時代、それは当たり前過ぎる」と思えるような方向に向かっていかなければ、いやその前に、まず自分がそうならなければと、戒めにも思う取材でした。

授産所製品ブランド化 浜松・北区三ヶ日のNPO法人 静岡新聞 2018年4月20日



新ブランド「サンスト・ファクトリー」のロゴが入ったミカン加工品＝浜松市北区三ヶ日町のゼロベース三ヶ日

福祉施設を運営する浜松市北区三ヶ日町のNPO法人すだちはこのほど、施設利用者が地元産ミカンを使って手掛けた加工品をブランド化し、販売を始めた。授産品の認知度を高め地元農家との連携強化につなげ、障害者の賃金向上を目指す。

同NPOが運営する同町の授産所「夢ワークたちばな」ではあめや瓶詰めといったミカン加工品の製造工程の一部を担う。施設利用者が農家から仕入れたミカンの皮むきを行い、完成した商品と同NPOが地元のマルシェなどで売ってきた。さらなる販売促進や働く障害者の意欲向上を狙い「サンスト・ファクトリー」とブランド名を新たに付けた。

ブランド名には▽食の安全▽素材の味へのこだわり▽まっすぐ真剣に一と製品を作る上での三つの思いを込めた。ミカンソースやジュース計5種類の製品にロゴのシールを貼り、

同NPO運営の同町の生活介護事業所「ゼロベース三ヶ日」で販売している。

同NPO職員の平沢文彦さん（44）は「ブランドの魅力が高まれば興味を示す生産者が増えて、施設利用者の活躍の場が広がる」と展望を話した。

彫刻の伝統工芸継ぐ プロ並み技術で収入増

福祉新聞 2018年04月20日 編集部

線彫りのお盆を作る利用者

富山県南砺市の社会福祉法人マーシ園（島田勝由理事長）の障害者施設「マーシ園すてっぷ」は、国の伝統的工芸品に指定されている井波彫刻の技術を駆使した、木彫製品を製造・販売している。

井波彫刻は、1390年に同市井波地区に瑞泉寺を建立した際、京都から来た御用彫刻師に教えを受けた地元大工により根付いたという。荒彫りから仕上げ彫りまで200本以上ものノミ・彫刻刀



を使うのが特徴だ。

大きな糸のこで穴をあける利用者

マーシ園は1959年の身体障害者授産施設開所時から、この木彫に挑戦。「下肢障害があっても上半身が動けばできる。技術を覚えれば、プロと同等の収入を得られると考えた」と豊川覚・本部事務局次長は話す。

「一人前になるには10年かかる」と言われる技術習得は大変だったが、プロの彫刻師を職員として雇い、経験



を積み重ねることで利用者の腕も上がった。

製作しているのは、同県で男児が生まれたときに母親の実家から贈る「天神様」や、祭礼用の「獅子頭」、縁起物の「達磨」「七福神」など。オリジナルの線彫り盆なども作っている。価格は市価より1～2割安め。約40センチの天神様が30万円から、お盆は2500円から販売している。

左から獅子頭、白、天神様

木彫に携わる利用者は21人。障害種別や経験年数はさまざまだが、プロ同等の職人も多い。特に欄間などの飾り彫りに欠かせないすき間を作る穴開けは、職人の高齢化により、できるのはマーシ園だけになった。同地区の職人300人からの依頼を一手に引き受けており、伝統的工芸を下支えする。

「少子化や、洋間みの家が増え、天神様を飾る床の間や欄間が少なくなった。最盛期は1800万円あった収入も最近では720万円まで減った」と話す倉賀野設彦・管理者。今後は白の飾り彫りなどオリジナル製品の開発にも力を入れたいという。

一昨年からは、地元特産の玉ネギを使ったレトルトカレーの製造も始めた。地場産業の井波彫刻振興に寄与してきた社会福祉法人ならではの地域への慈愛（mercy）の精神

がある。

給付費不正受給 障害児向け施設 県、5247万円返還請求 /愛知

毎日新聞 2018年4月20日

常勤の要件を満たさない職員を常勤として申請し、春日井市から給付費を不正に受給していたとして、県は19日、春日井市白山町6の障害児向け放課後等デイサービス施設「NCPあいあい」に対し、半年間の新規利用者受け入れ停止の行政処分をするとともに、不正受給で得た給付費など計5247万円の返還を求めた。

施設はNPO法人ニードケアプロデュースが運営。県によると、施設には「常勤」として雇用した児童発達支援管理責任者（児発管）がいた。この施設では本来、月160時間勤務しないと常勤の要件を満たさないが、児発管は月105時間しか勤務していなかった。内部告発により発覚した。

児発管は2010年4月から勤務し、不正に受給した給付費は総額約6915万円。県は時効分を差し引いた約3748万円に加算金を上乗せした約5247万円を市に返還するよう求めた。

施設側は「常勤の要件について理解不足だった」とし、返還に応じる意向を示しているという。施設の現在の利用者はこれまで通り継続できる。【道永竜命】

吹田の揺さぶり死 情報共有されず 府部会が報告書 /大阪

毎日新聞 2018年4月20日

吹田市で2016年、生後1カ月の男児が父親に揺さぶられて死亡した事件を巡り、児童虐待の事例を検証する府の専門部会（部会長＝才村純・東京通信大教授）は19日、関係機関で情報共有が十分にされていなかったとする報告書を松井一郎知事に提出した。

報告書によると、16年10月、父親に揺さぶられた男児が心肺停止状態となり、救急搬送されたが12日後に死亡。父親は昨年8月に傷害致死の疑いで逮捕され、起訴された。

報告書は、男児の姉の妊娠時に母親も顔を殴られてけがをしていたことや、男児の出産直前に育児を支えていた母方の祖母が亡くなるなど、虐待が起きる恐れが高い事案だったと指摘した。

また、医療機関から事件前に「見守りが必要」と伝えられていた吹田市立保健センターが他機関と情報を共有せず、抱え込んでいたとした。才村部会長は「関係機関が情報を共有し、共同で援助することが可能だった」と話した。【藤頭一郎】



文字を音に変換するメガネ きっかけは父親（東京都）

ニュース 24 2018年4月20日

文字を音に変換してくれるメガネ、OTON GLASS（オトングラス）。視覚障害など、文字を読むことが困難な人のために開発された。小説などの長い文章も…OTON GLASS「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」さらに翻訳機能もついている。使い方は

読みたい文字の方を向き、横についているボタンを押すだけで、書かれた文字を読み上げてくれる。仕組みはメガネに設置されたカメラで文字を画像データにし、それをクラウド上のAIに送る。AIは画像から文字を認識して音声データに変換、これが戻ってきて“OTON GLASS”から再生される。開発を行う島影圭佑さん。開発のきっかけはお父さんの病気だった。脳梗塞を患い、文字が読めなくなってしまう後遺症が残ってしまったのだ。そのころ大学生だった島影さんはお父さんが不自由しないように“OTON GL

ASS”の開発をはじめた。製品名のOTONは“音”と、お父さんと呼ぶときの“おとん”からきている。幸いお父さんの症状は回復しつつあり、島影さんは他の文字を読むのが困難な人にも“OTON GLASS”を使ってもらいたいと、改良を重ね製品化にこぎつけた。使いたいという声も多く低価格で届けたいと考えているが福祉機器としては前例がなく、保険適用にできるのかななどの問題もある。島影さん「これを視覚障害者の方たちが求めているけども、どういう制度設計にしたらいいのかというの、いちから考えないといけない」 今後は翻訳機能で海外渡航者にも使ってもらいたいと考えているという。島影さん「だれもが文字を読む世界をこの“OTON GLASS”で実現できればいいなと思っています」 【the SOCIAL futureより】

10万人以上「通級指導」が過去最多に（東京都） ニュース24 2018年4月20日
世の中で議論を呼んでいる話題について、ゲストに意見を聞く「opinions」。今回の話題は「通級指導 過去最高」。グラフィックデザイナーのライラ・カセムさんに聞いた。

「通級指導」とは、言語障害や学習障害などがある児童や生徒が、通常学級に在籍しながら、教科によっては別の部屋に行き、個別授業を受けること。文部科学省によると、通級指導を受けている子どもは昨年度、10万8946人で、初めて10万人を超えた。文部科学省では、「1人1人の障害にあわせ、個別に指導する必要性の理解が広まってきている」としている。—この話題についての意見を書いていただきました。「らしさ」ですね。その人らしいものだったりとか、特技だったり、興味だったり、どうやって具現化していき、それを自分の技にしていくかということのを重要にしていくのが、いちばん教育においては大事なと。まずは自分でできること、自己肯定と言いますか、それをできるようにすることが大事だと思います。—実際に、商品とか開発をされていますけど、そこで大切にしていることとかあるんですか。やっぱりみんながキープレイヤーになる、ゴールに行くまで、関わる人すべてが「関わられた」と思える、自分がここまで成し遂げられたと思えるように設計していくということをいつも大事にしています。—障害者の方も自分でやったと言えると、喜び方が違いますね。そうですね、実は、私は不登校の子どもの教育プログラムにも関わっていて、その子たちも志はすごく高いんだけど、数学や文字が読めなかったりとか、例えば自分は興味があるけど、それを将来、自分の仕事にしていくとなった時に、例えば、特技だけを特化するのではなくて、それを補うための根本的なスキル…計算だったり、読み書きだったりをサポートしながらやっていくということを重視したりしますね。—この通級学級もその個別にあわせていくというのは大切なものかもしれませんね。大切に、やはりそれを元に通常の教育にも取り入れたら、もっともっと教育が時代にあったものになっていくんじゃないかと思います。



■ライラ・カセムさんプロフィール 日本育ちのイギリス人グラフィックデザイナー。東京大学・先端科学技術研究センターで、研究員も務めている。現在は東京・足立区の障害福祉施設「綾瀬ひまわり園」を拠点に、障害者の社会参加と経済自立につながるアート作品の制作と商品づくりのプロジェクトを全国で展開している。 【the SOCIAL opinionsより】

“アート”で障害者の経済自立を目指す（東京都） ニュース24 2018年4月20日
グラフィックデザイナーのライラ・カセムさん。日本育ちのイギリス人のライラさんは、東京大学・先端科学技術研究センターで、研究員も務めている。現在は東京・足立区の障害福祉施設「綾瀬ひまわり園」を拠点に、障害者の社会参加と経済自立につながるアート

作品の制作と商品づくりのプロジェクトを全国で展開している。ーライラさん、このプロジェクトではどんなことをしているのですか？ まずは、アートをもっと活性化したいという施設の職員のみなさんと、1人1人に合ったようなアート支援をして、アートを活性化させて、アートの文化をつかって、そこからそのアートを商品にして、メンバーの賃金にするというような活動をしています。ーこの写真にあるような？ そうですね。アーティストの方がテキスタイルにしたり、あるいは教育の現場で、生徒たちの中間役になって本をつかって売ったりとか、ジュエリーにして自己制作したりというようなことをしています。【the SOCIAL guestより】



なくそう心の段差 身体障害者補助（盲導・介助・聴導）犬法16年 介助犬の仕事を紹介 木村さん、新人研修で実演 /兵庫 毎日新聞 2018年4月20日



木村佳友さんと介助犬デイジーを囲んで話をする新入社員ら＝大阪市北区の大阪第一生命ビルで、高尾具成撮影

使用者の会・木村さん、大阪・第一生命で

第一生命保険・関西コンサルティング営業室（大阪市北区梅田1）は19日、日本介助犬使用者の会会長の木村佳友さん（57）＝宝塚市＝を新人研修の講師に招いた。【高尾具成】

働くことを通じて、どのような社会貢献ができるのかを新入社員に考えてもらうため、研修後に大阪、兵庫、京

都など近畿圏で総合営業職として働く60人が参加した。

木村さんは妻美智子さん（55）をアシスタントに、デイジー（ラブラドルレトリバー雌・6歳）と一緒に講演。「介助犬は『くわえる』『押す』『引っ張る』『渡す』の主に四つの動作の組み合わせを学び、生活に必要な約100項目もの指示を理解し、見守ってくれています」と介助犬を紹介した。

また、5月には「身体障害者補助犬法」が成立から16年となる。身体障害者の自立や社会への参加促進のため、公共施設などに補助犬の受け入れを義務付けた同法の成立には、初代の介助犬シンシアが尽力したことや、2代目のエルモとの日々についても話した。オートバイ事故で体が不自由になった後、保険に助けられた体験も語った。

その後、介助犬の仕事の実演を披露。椅子に置かれたテレビのリモコンなどを指示通りに口でくわえて木村さんに渡すデイジーの姿に拍手が起こった。

メモを取りながら耳を傾けていた新入社員に、木村さんは「相手を思いやる気持ちを忘れずにがんばってください」と激励した。

「バリバラ」 玉木さん語る 障がい者条例施行の京都・長岡京市

京都新聞 2018年4月20日

京都府長岡京市は5月13日午後1時半から、市障がい者基本条例の施行記念イベントを、同市天神4丁目の中央公民館で開く。テレビ番組に出演中の身体障害の当事者が講演し、市内の障害者団体代表や支援者らを交えて「誰もが共に暮らせる長岡京市とは？」をテーマにシンポジウムを行う。

4月1日の条例施行をアピールし、障害への理解を市民に広めようと企画した。

基調講演は、NHKEテレ「みんなのためのバリアフリー・バラエティ『バリバラ』」出演中の兵庫県西宮市社会福祉協議会職員玉木幸則さんが、「このまちで自分らしく暮らす」

と題して語る。

シンポジウムでは、条例策定の検討会議で委員を務めた長岡京市身体障がい者団体連合会の三好俊昭会長や、向日が丘支援学校の平岡克也校長、市商工会の山本敏彦さんらが語り合う。

会場には、手話通訳や要約筆記などを配置する。無料。定員200人で、5月2日までに市障がい福祉課075（955）9549へ申し込む。

発達障害の子や親を支援 広島県と塩野義製薬、連携協定 朝日新聞 2018年4月20日 握手をかわす湯崎英彦知事（左）と手代木功・塩野義製薬社長



発達障害の子どもや保護者らを支援するために、広島県と塩野義製薬（本社・大阪市）は連携・協力協定を結んだ。県は、同社が持つ様々なネットワークを活用して、効果的な取り組みにつなげていきたいという。

両者は7月に、教育アドバイザーを招いて広島市内で啓発セミナーを開く。ほかにも、子どもへの家庭内での対応を学ぶ「ペアレント・トレーニング」の説明会や養成研修

会などを予定している。

協定の締結式で、同社の手代木（てしろぎ）功社長は「手を携えて、できる限りの活動をさせていきたい」と話し、湯崎英彦知事も「協力・連携することで、子どもの成長のサポートができる」と期待感を示していた。（北村浩貴）

人事 鳥取市 185人が異動 乳幼児から18歳まで、相談窓口一元化 /鳥取

毎日新聞 2018年4月20日

鳥取市は19日、185人の人事異動（5月1日付）を発表した。任期満了に伴う市長選で、規模を縮小した4月の定期異動を合わせると計589人規模となった。子育て支援強化として、健康こども部の「こども発達・家庭支援センター」を「発達支援」と「家庭相談」の両センターに改組し、臨床心理士をそれぞれ増員。発達支援では乳幼児から18歳までの相談窓口を一元化し、家庭相談では妊娠・出産相談、虐待防止啓発などの業務を担う。防災面では、防災調整監を危機管理局に再編した。中核市移行で移譲された保健所業務に絡み、新庁舎整備に合わせた防災システムの充実化など、新たな業務が加わったため2人増員した。【阿部絢美】

街角 函館 福祉施設で本格ラーメン提供 /北海道 毎日新聞 2018年4月20日

市内で福祉施設を運営する株式会社「吉住」が、利用者や地域住民に無料でラーメンを振る舞う「本格手作りラーメンBar」を今年も開催。お年寄りらが熱々のめんを口にしながら「おいしいね」と話に花を咲かせた。同社統括管理者でラーメン店の経験もある吉住裕幸さん（37）が「外食の機会が少ない高齢者らにラーメンを楽しんでもらいたい」と自ら腕を振るうもので、今年で11年目。同市白鳥町の「デイサービスよしずみ白鳥」では17、18の両日に約180食が提供された。これで3回目の体験という女性利用者（75）は「ラーメンも最近はたまに外で食べる程度だけど、ここが一番おいしい。夏は冷やしラーメンも食べたいね」と笑顔で語った。同サービスは20、21日に「デイサービスよしずみ東山」でも予定している。



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行